



鳥が問う「人間とは何か」
日本で鶺鴒がおこなわれている場所には鶺鴒塚（鶺鴒養塔）が建立されている。各地の鶺鴒匠たちは、鶺鴒の最中に命を落としたウミウを埋葬し、鶺鴒養をおこなう。ウミウの冥福を祈る意味を込めて卒塔婆を立てるところもある。以前、わたしは中国で鶺鴒の調査をしていたとき、日本の鶺鴒養のことを中国の鶺鴒漁師たちに話したことがある。すると、彼らは一様に驚きの表情をみせ、異口同音に「そのようなことをしてどうなるのか」という。ウミウに特別な感情を抱いたり、死亡した個体を供養したりすること

鳥と人とのかわり

うだしきへい
卯田 宗平

民博 先端人類科学研究部

大阪モノレール万博記念公園駅からみんぱくまで、わたしの足で約一四〇〇歩。公園内をとる道すがら、毎日さまざまな鳥をみることが出来る。春にはカイツブリやカルガモが子育てをし、夏になるとカワラヒラやシジュウカラが水浴びをする。秋から冬にかけてはシロハラやツグミ、ジョウビタキなどが落ち葉をはねのけて小動物や木の実を探す。鳥をみながらの通勤も楽しいものである。

特集

とり

二〇一七年の干支は「酉」。一般的にはニワトリが当てられるが、鳥類全体に視野を広げると、人とのかわりは多様である。大空を飛ぶ姿、色鮮やかな羽根、美しいさえずりに人はひかれ、さまざまな意味を込める。一方で、その生態については身近な種でさえまだわかっていないこともあるようだ。そんな「とりどり」のとりにもつわるお話をとりあげる。



水入れ容器。アメリカ合衆国 H0074886

日々の暮らしから精神世界まで
現在、地球上には一万種前後の鳥がいるといわれている。鳥はその分布域が広く、七大陸のすべてでみることが出来る。鳥と同じく地球上に広く分布するわたしたち人間は、各地に生息する鳥と深くかわりながら生きてきた。ときには、その肉を食べ、その声を愛で、その羽毛を身につけ、その存在を伴侶にした。また、鳥を神の使いとみなしたり、靈魂を鳥に託して冥界に届けたりもする。

北アジアのシャマンのなかには頭部の衣装に猛禽類の羽毛を飾りつけるものもある。ヒンドゥー教では頭部がワシ、胴体が人間として描かれるガルダが神の鳥として崇拜されている。キリスト教では、新しい命のシンボルとして鶏卵にカラフルな色づけをする復活祭の慣わしがある。こうした鳥と

人とのかわりの事例は、地域や時代、宗教の違いを超えて世界各地からいくらかでも集めることができる。

鳥と人とのかわりについてひとつの事例をいえば、滋賀県琵琶湖において在来魚などを捕食するカワウを「害鳥」として駆除している。一方、愛知県知多半島の鶺鴒の山ではかつてカワウの「コロニー」（集団営巣地）が大切に保護され、そこで集められた糞尿がリン酸肥料として販売されていた。村民が糞尿の売却益で村の小学校を改築した話は有名である。現在でもその小学校の校章には羽を大きく広げたカワウがあしらわれている。わたしたちは、同一の種に対しても両義的な価値づけをしていることがある。



中国の鶺鴒漁師たちはカワウの後方から竹棒を大きく振りまわす。細くて長い棒を布がるカワウは前進速度を速める

あろうか。むしろ、鳥と人とのあいだに線を引き、ウミウは「魚を獲る手段である」と割り切って考える方が魚は維持できる、とも考えられる。

実際、日本の鶺鴒でもウミウに名前を付けない鶺鴒匠がいる。名前を付けてしまうと「情が入ってしまう」からである。彼らもまたウミウに特別な感情を持ち込まないようにしているのである。

の意味がわからないようであった。

では、中国の漁師たちのそうした態度や考え方をどのように理解すればよいのだろうか。もしかすると、鶺鴒をなりわいとすする漁師たちはウミウに対して深い思い入れをしない方がよいのかもしれない。中国の鶺鴒飼では、一回の操業で二〇〇羽前後のウミウを同時に利用し、毎日六時間以上も漁を続ける。そんな彼らがウミウ一羽一羽にうしろめたさや罪の意識を強くもっていたらどうなるであろうか。日々の鶺鴒飼は成り立つて



飼育されているカワウ。ひもでつながれていなくても逃げない

歌を運ぶ鳥ガルダ

たちかわむさし
立川 武蔵

民博 名誉教授

ことばの羽ガルダ鳥

ベツレヘムからメーラが来た。インド生まれの伝説の鳥ガルダについて書いてほしいという編集者からの依頼だった。このメーラはまさにガルダだと思っただ。ユダヤの神ヤブエはことばによって世界を創造したという。インドにおいてもことばはきわめて重要だ。そのことばに羽が生えて飛んでいくとインド人は考えた。ことばの羽あるいは「ことばを運ぶ鳥」がガルダ鳥である。

古代インドのバラモン僧たちは、彼らの聖典ヴェーダ（知識）は人間の作品ではなく、永遠なものだと信じていた。儀礼において僧たちはヴェーダの文句を神に対する讃歌として吟じながら、神々に供物を捧げたのである。古代の神々は讃歌と供物によって鼓舞され、人間たちの希望をかなえる存在であった。つまり、ヴェーダのことばこそが力あるものであり、世界の根本原理ブラフマン（梵）とよばれたのである。聖典ヴェーダを誦いあげる



トラナに見られるガルダ。カトマンドゥ

ことはバラモン僧たちのみに認められた特権であった。ヴェーダということばは鳥、つまりガルダである。そして、ヴェーダのことばは供儀を具現する神ヴィシュヌを運ぶ。ガルダ鳥がヴィシュヌを乗せて飛ぶ姿はまさにこのことをあらわしている。

ガルダ (Garuda) という名前は、動詞グリー（声を出す）および動詞デー（送る）の両者に由来すると考えられている。天界に住むヴェーダの神々に対して誦いあげられた声のイメージは、やはり羽のある鳥がふさわしい。すでに紀元前二〜九世紀の編纂の『リグ・ヴェーダ』にはガルダの前身と思われるガルトマンの名前が見られるが、この神は世界を照らす太陽光線とも同一視された。



ヴィシュヌを運ぶガルダ。カトマンドゥ

蛇をとらえるガルダ鳥

またガルダは蛇をとらえる鳥として知られており、捕まえられた蛇がそれぞれの足からぶら下がっている図がしばしば見られる。ガルダが有する蛇は時間（カーラ）を象徴する。ネパールなどの寺院の扉上部には半円形の装飾（トラナ）がかけられるが、その頂上にはガルダが見られる。ガルダの足からは二匹の蛇が半円の外周に弧を描いて垂れ下がる。この蛇は宇宙創造の際、まだ混沌状態にある世界を囲む最初の蛇（ウロボロス）である。この最初の蛇は時間と関係している。

ガルダは神を運ぶ知識であり、世界・時間を握る存在である。ガルダは日本ではカラス天狗となったというが、インドのガルダに比べると規模が小さい。天狗は、そろそろお山から降りてきて、ガンバッテホシイ。

教会の鳥たち

すがせあきこ
菅瀬 晶子

民博 研究戦略センター

鳥をかたどる

私事になるが、学生時代から今に至るまで、インコを飼っている。調査に出るときは当然連れてゆく訳にもいかず、友人に預けることになるので、さみしさを感ずることもしばしばだ。しかしさいわいにも、調査地で鳥に出会う機会は意外と多く、そんな鳥たちに慰められている。なにも生きた鳥とは限らない。中東のキリスト教徒をおもな調査対象としているわたしにとって、教会で鳥をかたどった装飾と出会うこと



聖墳墓教会内のレリーフ。聖杯にかしづくクジャクたち

は、大きな愉しみだ。

例えば、聖地エルサレムの象徴的存在のひとつであり、全世界のキリスト教徒が生涯に一度は巡礼したいと熱望する、聖墳墓教会。この教会内部の、イエスが磔刑に処せられた場所にある礼拝所のモザイクが近年修復されたが、そのなかにもたくさんの鳥たちを見つけることができる。いうまでもなく、彼らはいずれも宗教的な象徴性を帯びた存在だ。キリスト教においてもっとも重要なのは、聖霊の象徴としてあらわされるハトだが、一般にはむしろ、オリーブの枝をくわえた平和の象徴としてのハトのほうが、ひろく知られている。また、胸を裂いて流れるおの血でヒナを育てるペリ

不滅と復活の象徴

カンは、イエスの受難と自己犠牲の精神をあらわしている。実在ではなく想像上の鳥ではあるが、炎のなかに立つフェニックスは、イエスの復活の象徴。古代エジプトやギリシャ・ローマの時代から、不死を司る聖鳥として語り継がれ、レバノンやエジプトなどに住まうとされてきた。フェニックスの語源は、地中海の覇者として君臨した古代レバノンの海洋民族、フェニキア人と同じであるという説もある。

聖墳墓教会の内部には、中東に教区をもつ正教とカトリックの諸教会がそれぞれ礼拝所をもっているが、そのなかでもアルメニア正教が管轄する場所では、クジャクの装飾が目を引く。クジャクは魂の不滅を象徴し、第一次世界大戦中にアナトリア半島からエルサレムに移住したアルメニア人が作る陶器でも、好んで描かれる。クジャクはアルメニア人以外でも、イラクやシリアに住むヤジディーとよばれる人びとにとって象徴的存在である。ヤジディーはゾロアスター教やアブラハム一神教など、中東で誕生したさまざまな宗教の要素が混ざり合ってきた特殊な宗教を信じており、

帰国したわたしを迎える愛鳥菊次郎



クジャク天使（マラク・ターウース）という聖なる存在を崇めている。彼らが非ムスリムとしてイスに迫害されていることは、すでにご存じの方も多いだろう。

鳥そのものではないが、教会でみかける鳥に縁の深いものとしては、ダチヨウの卵が挙げられる。生命と復活の象徴として、天井からつり下げられていることが多い。復活祭の時期の風物詩、イースター・エッグもまた同じく、生命と復活の象徴である。学生時代に留学中、インコ恋しさが募っていたときにこのダチヨウの卵を見かけ、イースター・エッグ風チヨコとモール細工のひよこを買いたってしまったのは、今となってはちよっと笑える思い出である。



聖墳墓教会内のモザイク。オリブの枝をくわえたハト

して、自慢の愛鳥を介した交流の様子を頻繁に見かける。そして、路地や住宅街で少し耳を澄ませば、小鳥の鳴き声が頻繁に聞こえてくるのだ。

さえずりコンテスト

週末の朝七時半になると、数個の鳥かごにお手製のカバーをかけ、バイクや車の荷台に積んだ人たちが静かな公園に集まり始める。競鳴会に参加するためだ。

競鳴会ではおもに、求愛や威嚇のときに



審査の開始まで、カバーをかけられたまま待機する小鳥たち

鳥の声を愛でる人たち

にしやまふみえ
西山文愛

総合研究大学院大学博士課程

鳴き声が聴こえる

「トウトウ・トウトウトウ」

マレーシア北部に位置するコタバルで、住宅街の路地を歩いていると、聴きなれた鳥の鳴き声が聴こえてきた。鳴き声をする方向に耳を澄ませながら、歩み寄ると、色とりどりの布をかけた鳥かごの連なりが見えてくる。さらに鳥かごのながが見えるくらいまで接近すると、そこにはチヨウシヨウバトがひとつの鳥かごに一羽ずつ飼育されていた。

わたしの調査地であるマレーシアでは、小鳥の声を愛で鳴き声を競い合わせる「競鳴会」が頻繁におこなわれている。小鳥は飲食店の店内や、家の軒先で飼育されており、マレーシアの街や住宅街を出歩いた際に、よくよく耳を澄ましてみると、小鳥たちの鳴き声が聴こえてくる。

このようなさえずりを愛でる愛鳥飼育は

雄鳥が歌う旋律のような「さえずり」を競い合う。マレーシアでは、ハト科のチヨウシヨウバトとカノコバト、ヒタキ科のアカハラシキチヨウ、シキチヨウ、ヒヨドリ科のコウラウンの競鳴会が頻繁におこなわれている。そのため、軒先で見られる鳥もほぼ、この五種である。また、鳥の種類によって、鳥かごの造形が異なるので、遠くから鳥かごを見ただけで、飼育している鳥や競い合っている鳥の種類を推測できる。

競鳴会のルールは、鳥の種類と、さらに地域にも若干異なるのだが、飼育者は、健康的で美しい鳴き声を奏できるように愛鳥のトレーニングをする。その様子は、さながらコーチと選手のような関係だ。

飼育者たちは、その日までに大事に育てた愛鳥のかごを審査台のポールにひっかけて、審査員たちの審査を二、三時間静かに見守る。そのときに、飼育者は、もってき



チヨウシヨウバトの鳥かごカバー



競鳴会に参加するため、朝7時ごろから鳥かごをもって続々と集まる

現在、マレーシアに限らず、シンガポール、タイ、ブルネイ、ベトナム、中国、香港などといった、東アジア、東南アジアの比較的広い範囲で人気がある。中国からの影響が強いと思っていたのだが、マレーシアの競鳴会では、マレー系ムスリムの参加者が多く、華人の参加者は少数だった。軒先で小鳥を飼育していた家もマレー系の住宅が多いのが特徴だ。

そして、都市部や農村部を問わず、民家の軒先や飲食店で小鳥を飼育している様子や、飼育者同士が公園などに鳥かごを持参

たすべての愛鳥を出場させるわけではなく、コンディションがベストな子たちを会場で選出し大会に出場させる。審査がおこなわれているポールの横には、その日出場できなかった補欠の鳥かごが連なり、いつか来る自分の出場を今か今かと待っているかのように見えた。

公園には、選手も補欠も含めて数百羽の小鳥たちの鳴き声が響き渡っている。それを静かに見守るコーチたち。これが、マレーシアの週末の朝に繰り広げられている光景である。

みんぱく展示場内のさえずり

さて、みんぱくの本館展示場で「バードウォッチング」をしてみると、さまざまな地域の鳥の羽根を使った装飾品や、描かれた鳥に出会うことができる。じつは、鳥と虫の鳴き声が聴こえてくるスポットがあることをご存知だろうか。それは、西アジア展示と音楽展示の境目に立つと聴こえてくるのだ。音楽を再生する機械が無い時代に、鳥の鳴き声はひとつのメディアだったのかもしれない。小さな小鳥のメロディを競い合う、不可思議な交流が、今もなお、東・東南アジアの広い地域で活発におこなわれているのだ。



マガモとガマがあしらわれた飾り皿(アメリカ合衆国、1930年)

シジュウカラ語を 解き明かす

鈴木 俊貴

京都大学生態学研究センター機関研究員

言語をもつのは人間だけである——これが言語学者や動物学者の常識だった。しかし、最近の研究で、野鳥の一種シジュウカラが、「単語」や「文法」を用いて仲間とコミュニケーションをとっていることがわかってきた。

シジュウカラの単語

シジュウカラはスズメほどの大きさの小鳥で、宅地や公園でもよくみられるとても身近な存在だ。本種は春先、樹木にできた空洞(樹洞)に苔を運んで巣をつくり、一夫一妻で繁殖する。ヒナはおよそ七〜一〇羽。親鳥から青虫をもらい、三週間ほどで親顔負けの大きさにまで成長する。樹洞のなかとはいえ、けっして安全なわけではない。時折、カラスがやってきて、入り口からヒナをつまみだし、食べてしまうことがある。また、ヘビは樹洞に侵入し、ヒナたちを丸呑みにする。



巣箱のなかでうずくまるヒナたち

親鳥は、巣に近づくカラスやヘビをみつけると、繰り返し鳴き声を出して騒ぎ立てる。このような鳴き声は他の鳥でも知られるが、長いあいだ単なる「叫び声」であると考えられてきた。しかし、わたしの一連の研究から、この声は天敵の種類をヒナに伝える「単語」であることが明らかになった。

シジュウカラの親は、カラスをみつけると「チカチカ」と鳴く。この声を聞くと、ヒナたちは樹洞のなかで、カラスの嘴が届かない位置でうずくまる。一方、親鳥はヘビをみつけると「ジャージャー」としわがれた声を出す。これを聞くと、ヒナたちは一斉に樹洞を飛び出す。ヘビが侵入してくる前に、巣を脱出することで、捕食を回避できるのだ。つまり、「チカチカ」はカラスを、「ジャージャー」はヘビを示す声だといえる。

シジュウカラの文法

シジュウカラは秋から冬にかけて群れをなして生活するが、そのなかでもさまざまな音声を用いて情報を伝え合う。群れの仲間に危険を知らせる際は「ピーツピ(警戒しろ)」と鳴き、仲間を呼ぶ際には「チチチチ(集まれ)」と鳴く。しばしば、仲間とともに協力してフクロウやモズなどの天敵を追い払うことがあるのだが、その際は「ピーツピ・チチチチ」と組み合わせる。これは「警戒しながら集まれ(そして、ともに天敵を追い払おう)」という文であるといえそう。

この音声の組み合わせには規則がある。「ピーツピ・チチチチ」と組み合わせるが、「チチチチ・ピーツピ」とは発さない。実際に、正しい語順の音声をスピーカーから再生して聞かせてみると、シジュウカラは天敵を追い払うときと類似の行動(警戒しながら音源に近づく)で反応する。一方、語順を逆にした合成音を再生すると、これらの反応はみられない。つまり、シジュウカラは語順を正しく認識して、文の意味を解読していると考えられる。

このように、シジュウカラにもある程度の言語能力が備わっていることがわかってきた。他の鳥たちにも同様の能力があるのかは未だ明らかではないが、鳥類の音声研究はわたしたち人間の言語の起源を探るうえでも大きな鍵を握っているといえそう。

ガマや鳥とともに、 過去への旅へ

ピーター・J・マシウス

民博 民族社会研究部

水鳥たちの憩いの場

アメリカ英語でキャットテイル(猫のしっぽ)とよばれているガマ(学名Typha sp.)は、世界中の湿地帯でよくみられる、背の高いア

シの一種である。湿地帯を描いた絵画には頻りに登場するが、それはおそらくその特徴的な穂によるのだろう。暗褐色から赤褐色の穂が弾けると、幾千もの小さな種がまき散らされ、風に運ばれてゆく。この種が着水すると、水底に沈んでゆき、泥のなかで発芽する。ガマは小川の岸辺や湖岸に旺盛に繁茂し、まっすぐに生える葉は水鳥たちに安全な憩いの場を提供する。枯れた葉は、彼らの巣材にもなる。

繊維やガマから作られたものが、遺跡から出てくることは概してまれである。繊維が残存しないのは、ガマという植物の基本構造ゆえである。ガマの葉は空洞で、根の部分にまで酸素が行き渡り、植物全体をおって沼気(おもにはメタンガス)が泥から空気中に発散されるようになっていく。この構造ゆえに、ガマは水中に生えることができるのだ。空洞な葉はやわらかく、触れるとあたたかい。マットや雪ぐつ、かご、それにもちろん水鳥の巣がガマで作られてきたのは、じつにもっともな話なのである。

人にも動物にも
多様な自然環境で生育し、ひろく利用されてきたことから判断すれば、ガマはおそらく、人類がもっとも早くに利用しはじめた植物のひとつであろう。しかしながら、この説を裏付けるには明確な証拠が少なすぎる。ガマの

展示期間中、ガマについてさらにいろいろな話をきいた。種子島からきたある考古学者によれば、ガマのやわらかい、ふわふわした冠毛は、近代以前の日本で防寒具の中綿として使われていたそう。太平洋戦争時には、羊毛の代用品として使われていたという。因幡の白ウサギがガマの穂に寝そべったというのは、傷ついた肌を癒やすためだけではなく、じつは剥がれた毛皮のかわりにするためだったのではなからうか。ガマの種とともに水面を漂い、あるいは白鳥の背でくつろぎながら過去へとさかのぼり、ガマという植物が幾千の時の流れのなかでどのように使われてきたのか、この目で見てみたいものである。

(翻訳・菅瀬晶子)